

茗溪会公開講座「ことわざから探る英語圏の文化」

平成25年11月16日(土) 14時~筑波研修センター

講師 (藤原保明) プロフィール

略歴: 東京教育大学(現・筑波大学)大学院修士課程修了、熊本大学・筑波大学助教授、ロンドン大学客員研究員、筑波大学大学院教授を経て、現在は聖徳大学教授・文学部長、筑波大学名誉教授、文学博士。

専門分野: 英語学(英語史、音韻論、韻律論、音声学、語形成、統語論、など)

主要著書・訳書: 『古英語韻律研究』(溪水社)、『古英語の初歩』(英潮社)、『英語の語形成』(英潮社)、『言葉をさかのぼる』(開拓社)、『古英語の世界』(筑波大学)、『中世の食生活』(法政大学出版会)

高校英語教科書: *Milestone English Reading* (啓林館), *Revised Milestone English Reading* (啓林館)

記念論集: 『言葉の絆』(開拓社) [還暦記念]、*Tsukuba English Studies* Vol.27 (筑波英語学会) [退職記念]

はじめに

ことわざ: その国の民衆の生活から生まれた、教訓的な言葉。『新明解国語辞典(第七版)』

- (1) a. 「急がば回れ」
b. 「猿も木から落ちる」、「弘法にも筆の誤り」、「河童の川流れ」
c. 「紺屋の白袴」、「髪結い髪結わず」、「医者の不養生」、「坊主の不信心」、「儒者の不届き(ふとどき)」(人の道を説く儒者が不品行であること)
d. 「猫に小判」、「馬に銭」、「豚に真珠」(英語の諺の翻訳)
e. 「火を見れば火事と思え」、「人を見たら泥棒と思え」
f. (Even) Homer sometimes nods. (ホーマーでもこっくりすることがある) [*ホーマー(紀元前10世紀頃のギリシアの盲目詩人。Iliad『イリアッド』とOdyssey『オディッセイ』の作者といわれる大詩人)]
g. A horse may stumble on four legs. (馬は4本足でもよろめくことがある)「龍馬(りゅうま)の躓き」
- (2) a. 犬の場合: 犬追物(いぬおうもの)、犬釘、犬潜り(いぬくぐり)、犬走り(いぬはしり)、犬張子、犬防ぎ
b. 猫の場合: 猫足、猫板、猫車
c. 馬の場合: 馬筏、馬追い、馬返し、馬方、うまごやし、馬印(うまじるし)、馬跳び、馬の足、など。
d. Wolf barks in vain at the moon. 「狼は月に吠えついても無駄である」(「星まもる犬」)
e. The lion spares the supplicant. 「ライオンも嘆願者は助命する」(「窮鳥懐に入る時は獅師もこれを殺さず」)

I. 犬(dog)の諺

1.1. 日本語の犬の諺

- (3) a. 「犬死に」、「幕府の犬」、「犬侍」、「煩惱の犬」、「犬掻き」
b. 「犬が星をまもる」(卑しい者が及ばぬ望みを抱くこと、物欲しそうなことのたとえ)
c. 「犬は犬を食わない」(いかがわしい者同士でかばい合う)
d. 「犬の遠吠え」(臆病ものが陰で虚勢を張り、人の悪口を言うことのたとえ)
e. 「犬は骨で叩けば吠えない」(利得を目前にすると、人は侮辱をも甘受してしまうことのたとえ)
- (4) a. 「犬はその主(しゅ)を知る」(犬は自分の主人は誰だかをよく知っている)
b. 「犬は人に付き、猫は家に付く」(引っ越しの際、犬は主人について家を去るが、猫はその家に残る)
c. 「犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ」
d. 「犬は門を守り、武士は国を守る」(=「犬も町びいき」、「犬も村好き」)
- (5) a. 「犬にも用あり」(犬にだって使い道はあるのだから、まして人間なら簡単に捨てるべきではない)
b. 「犬猿の仲」、「犬猿もただならず」(犬猿の仲とどこか、もっと悪い)、「犬、猿も仕入れに従う」(犬や猿でも、

訓練すればそれに従う)

- c. 「犬の手も人の手にしたい」(忙しい時には犬の手までも借りたい。=「猫の手も借りたい」)
- d. 「犬も人を見れば尾を振る」(犬でさえ、人を見れば尾を振って愛嬌を見せる。人もあまり不愛想で愛嬌のないのはよくない)

1.2. イギリスの犬の諺

- (6) a. dog catcher 「下っ端役人」、dog-eared 「みすぼらしい、使い古した」、dog-eat-dog 「すさまじく争う、情け容赦のない」、dog-end 「タバコの吸い殻、最後の一番いやなこと」、dogged [dɒɡɪd] 「頑固な」、doggy 「きれ見よがしの」、dog paddle 「犬かき」、dog-poor 「極貧の」、dogsboddy 「下働き、雑用係」、dog-tired 「へとへとで」
 - b. doglike 「犬に似た、忠実な」
 - c. The dog is a faithful animal. 「犬(というの)は忠実な動物である」
 - d. The dog barks in vain at the moon. 「犬は月に吠えても無駄である」(=3b 「犬が星を守る」)
 - e. Dogs run away with whole shoulders. 「(まごまごしていると、)犬も両肩肉を取られてしまうから、そうならないうちに逃げ去る」(けちな家庭を嘲るのに用いられる)
 - f. Dogs that put up many hares kill none. 「多くの兎を追い立てる犬は一匹も殺せない」(「虻蜂取らず」) *put up=「獲物を狩る」(「二兎を追う者は一兎をも得ず」は翻訳)
 - g. A dog will endure no companions in the kitchen. 「犬は台所ではどんな仲間も許さない」(食欲・意地悪な者は競争相手を容赦しない)
 - h. The dog that fetches will carry. 「(獲物を)取ってくる犬は(獲物を)持ち去る」(他人のことを告げ口する者は、君のことを他人に告げ口する)
- (7) a. Dogs bark as they are bred. 「犬は育てられたとおりに吠える」(「内の習いは外で出る」)
- b. A dog will not bite if you strike him with a bone. 「犬は骨で打てば噛みつかない」(利益にありつけると思うと手荒な扱いも我慢する)
- c. Dogs are fine in the field. 「犬は野原ではちゃんとしている」(=「(手にとるな)やはり野に置け蓮華草」)
- d. Dogs bark more for custom than fierceness. 「犬は獰猛さよりは習慣で吠える」
- e. The dog that trots about finds a bone. 「走り回る犬は骨を見つける」(「犬も歩けば棒に当たる」)

まとめ

諺から判断する限り、日本人の犬に対する好意的な見方は予測以上に少なく、むしろ好ましからざる存在として認識される場合が圧倒的に多い。一方、犬に関する英語の諺の特徴は、予想に反して肯定的なものが少なく、日本語の場合と大差がない。ただし、表現としては、日本語の場合のように逆説的なものは少なく、犬に対する観察結果を忠実に反映したものが多く。

II. 猿 (monkey, ape) の諺

2.1. 日本語の猿の諺

- (8) a. 猿芝居、猿智恵、猿真似、猿面
 - b. 「猿が魚を釣る」(猿がしっぽで魚を釣ること。人真似の失敗のたとえ)
 - c. 「猿が髭を揉む」(人真似をして威厳をつくろうことのたとえ)
 - d. 「猿にカミソリ」(危険きわまりないことのたとえ)
 - e. 「猿の空風(そらしらみ)」(猿がいつも風を取っているふりをするが、実際はかっこうだけであること)
- (9) a. 「猿に絵馬」(取り合わせのよいもののたとえ) *猿を馬屋の守護とする信仰から生まれた。
 - b. 「猿の木登り」(物事をやすやすと巧みにすること。あやまりのないこと) (「猿も木から落ちる」参照)
 - c. 「猿の牙」(精白米の異称。または、真っ白い米やご飯などのたとえ)
 - d. 「猿の梢を渡る如し」(身軽くすばしこい動作のたとえ)

2.2. 英語の猿の諺

英語の猿：①ape [leɪp] (ゴリラ、チンパンジー、オランウータンなどの尾のない大型の類人猿)
②monkey [mʌŋki] (小型の尾のある猿)。

- (10) a. play the ape 「猿真似をする、悪ふざけをする」、go ape 「(突然) かつとなる、夢中になる」(米・俗語)、ape hangers 「(自転車などの) 上反りハンドル」(米・俗語)
b. An ape is an ape though clad in scarlet. 「猿は緋の服をまとおうが、猿は猿」(「猿に烏帽子」)
c. The ape kills her young with kindness. 「猿は子を過度の愛情で(抱きすぎて) 殺す」(「ひいひい孫は乳母がなめ殺す」)
d. The higher the ape goes, the more he shows his tail. 「高く登れば登るほど、猿は自分の尻を見せることになる」(卑しい人間は礼儀作法を知らないために、高位に就くとぼろを出すことが多くなる) (「桂馬(けいま)の高上がり」) *tail=「尻」
e. as wise as an ape 「猿のように利口な」(=愚かな、の意)
- (11) a. monkey bars 「ジャングルジム」、monkey bite 「キスマーク」、monkey bread 「バオバブ(の木、実)」、monkey engine 「杭打ち機」、monkey flower 「ミゾホオズキ」、monkey jacket 「潜水夫用上着」、monkey suit 「(ボーイなどの) 制服」、monkey wrench 「自在スパナ」
b. monkey business 「ごまかし、いたずら」、monkeyish 「猿のような、いたずらな」、monkey-shine 「悪ふざけ」、monkey trick 「いたずら」、monkeywrench 「...を破壊する」、monkey-wrencher 「過激な環境保護活動家」
c. monkey's allowance (, more kicks than halfpence ['heɪpəns]) 「(半ペニー貨よりも足蹴りの方が多) 猿の手当て」(猿回しの猿がもらった手当ては称賛よりも非難)
d. Women in state affairs are like monkeys in glass shops. 「国政に関与する女性はガラス商の店内の猿さながらである」(女性が政治に口出しすると、政治をめちゃくちゃに乱してしまう、の意) *17世紀中期の諺。

まとめ

猿は人の真似をすることを理由に、日本人から軽蔑されることが多いが、身体能力など、評価に値するものは諺にも表されていて、他の動物とは一線を画している。一方、英語の場合、猿にまつわる諺は多くなく、また諺のテーマとなる例はきわめて限られている。このことは、猿がイギリス人にとってそれほど馴染みのある動物ではなかったことを示唆している。また、該当例はすべて猿を軽視したものとなっていることは注目に値する。このことは、日本語の「犬猿の仲」が英語では cat and dog となっていて、犬と猿が対比されないことから明らかである。

III. 猫 (cat) の諺

3.1. 日本語の猫の諺

- (12) a. 猫足、猫板、猫要らず、猫車、猫じゃらし、猫跨ぎ、猫目石、猫柳
b. 「猫が肥えれば鯉節が痩せる」(一方が良ければ他方は悪くなることのとえ)
c. 猫かぶり、猫舌、猫背、猫の額、猫の目、猫も杓子も、猫糞(ねこばば)、猫耳
d. 「猫と庄屋に取らぬは無い」(鼠を取らぬ猫はなく、賄賂を取らぬ庄屋はない)
e. 「猫に鯉節の番」(過ちが起こりやすい状況のとえ)
f. 「猫に小判」(高価なものを与えても、何の反応も効果もないことのとえ)
g. 「猫の食い残し」(食い散らした様子のとえ)
h. 「猫の逆恨み」(猫が執念深く、人から恩を受けても逆に恨むといわれるように、人に助けられながら逆恨みすること)
i. 「猫の尻尾」(なくてもよいもののとえ。また、一番下の子。)
j. 「猫撫で声に油断するな」

3.2. 英語の猫の諺

- (13) a. cat-and-dog 「犬猿の仲の、いがみ合う、非常に投機的で疑わしい」、cat-and-mouse 「猫が鼠をなぶるような、じりじりところげきの機会をうかがう」、catfight(ing) 「女性同士の喧嘩」、cat ice 「(水が引いて取り残

された) 薄氷)、catlick 「おざりな洗い方」、catlike 「猫のような、ずるい」 (*doglike 「忠実な」を参照)、catnap 「うたた寝 (する)」

- b. Cat after kind, a good mouse-hunt. 「猫は天性によって、上手な鼠捕りである」 (「猫と庄屋に取らぬはない」) (13世紀後半)
- c. The cat knows whose lips she licks well enough. 「猫は自分が誰の唇をなめているのかをよく知っている」 (「犬はその主 (しゅ) を知る」)
- d. The cat shuts its eyes while it steals cream. 「猫はクリームを盗む時に目を閉じる」 (「耳を覆うて鈴を盗む」 * 人は欲に駆られて罪を犯す時、悪の意識に対して目をつぶるものだ、の意)
- e. Cats eat what the goodwife spares. 「主婦が儉約して食べないでおくものを猫が食べる」 (「親は木綿着る、子は錦着る」 * 爪に火を灯すようにして親が貯めた金を子どもが湯水のように使い尽くす、の意)

まとめ

猫に関する諺と語句から判断する限り、日本人は猫の性格を高く評価していない。一方、イギリス人は猫のずるさやだらしなさを批判しているが、鼠捕りに対する猫の持つ天性の能力はすなおに認め、諺にその価値を留めている。この違いはどこから来るのであろうか。イギリスでは居住環境が一因となって、中世以降、ペストの流行が繰り返されていた。鼠につく蚤が媒介する「腺ペスト」は17世紀になっても大流行し、1665年にはロンドンでは7万人の死者が出た。それゆえ、鼠を駆除してくれる猫は頼もしい存在であったに違いない。鼠捕りが上手なことをほめる諺があっても当然であろう。

IV. 馬 (horse) の諺

4.1. 日本語の馬の諺

- (14) a. 馬筏、馬追い、馬返し、馬方、馬肥やし、馬印、馬跳び、馬なり、馬の足、馬の背、馬乗り、馬蠅、馬槽 (うまぶね (=まぐさを入れた桶))、馬屋、馬力
- b. 「馬面」、「馬の骨」、「馬に経文」、「馬 (の目) に銭」、「馬 (の耳に) 念仏」、「馬の耳」、「馬の耳に風」
- c. 「馬に出る」 (やじ馬となってまぜっかえす)
- d. 「馬を引く」 (遊里などで遊興費を支払えなくなった客が、取り立て役の男を連れて帰る。* 「馬」は代金取り立て役)
- e. 「馬が合う」、「馬は馬連れ」 (同類相伴ってうまくいくことのたとえ)
- f. 「馬は武士の宝」 (武士の戦場での働きは、乗っている馬の力によるところが大きいから、武士の宝とすべきものである)
- g. 「馬は蹄の腐るまで浮く、牛は尾の腐るまで浮く」 (馬も牛も水には強い)

4.2. 英語の馬の諺 (馬 horse、口語 nag、小型の馬 pony、乗用馬 mount、軍馬 steed、雄の子馬 colt)
イギリスの小説家、ジョージ・オーウェルの代表作『動物農場』(Animal Farm) に登場するボクサー。

- (15) a. work like a horse 「がむしゃらに働く」、be strong as a horse 「ものすごく力が強い」、horsefeathers 「つまらないもの」、horselaugh 「高笑い (をやる)」、horse sense 「あたりまえの良識、常識」、horse trader 「馬の売買、駆け引きのうまい人」、horsepower 「馬力」、horse marine 「騎馬水兵、ありえないもの、場違いな人」、horseplay 「ばか騒ぎ」
- b. A horse may stumble on four legs. 「馬は4本足でもよろめくことがある」 (龍馬 (りゅうめ) の躓き) (うっかり言葉遣いを間違えた時の言い訳)
- c. Horses, dogs, and servants devour many. 「馬、犬、召使いは多くの人を食い滅ぼす」 (= 「馬百石」: 馬などのために財を失う人が多い、の意)
- d. A horse, a wife, and a sword may be shewed, but not lent. 「見せてもよいが貸してはならないもの—馬に妻に刀」 (shewed=shown)

まとめ

日本では馬は近代化と共に価値や存在感が薄れていったが、イギリスでは馬はいまだに人々の生活に深く根付いてい

る。このことは諺や語句にも反映されていて、馬に関する英語の表現や諺には批判や軽蔑の対象となる例が少ない。

V. 豚 (pig) の諺

5.1. 日本語の豚の諺

(16) a. 豚草、豚小屋

- b. 「豚が雑炊を食っているよう」(騒々しく食べて、行儀の悪いさま)
- c. 「豚に念仏(猫に経)」(1726年)(その身を思っていくら聞かせても、何の効果もなく無駄であることのとえ)(=「馬の耳に念仏」)(1797年)
- d. 「豚を抱いて臭きを知らず」(正宗白鳥『人間嫌い』)(1949年)
- e. 「豚の軽業」(不格好で危なっかしいさま)(江戸中期)(=「豚の木登り」)(明治)
- f. 「豚もおだてりゃ木にのぼる」(とりたてて能力のない者でも、まわりからちやほやされると思いもよらないことをやってのける)(昭和20~30年代)

5.2. 英語の豚の諺 (pig, hog, swine; boar ((去勢されていない) 雄豚), sow (雌豚))

- (17) a. pig bed 「鑄床(いとこ)」、pigboat 「潜水艦」、pigfish 「いさき科の魚」、pig-in-a-blanket 「ソーセージ入りパン」、pig lead 「生子鉛」、pignut 「胡桃科の一種(豚の餌)」、pigskin 「豚革」、pigsticker 「畜殺人」、pigtail 「お下げ髪、弁髪」、pigweed 「あかざ属の草の総称」
- b. piggish 「豚のような、食欲な、不潔な、卑しい」、piggy 「子豚、小さくてさえない、食い意地の張った」、pigheaded 「強情な」、pig iron 「生子鉄(品質の低い鉄)」、pigpen 「豚小屋、不潔な場所」、pigswill 「残飯、まづい食べ物」
- c. A pig plays on the organs. 「豚がオルガンを弾く」(ばかばかしさ、不似合いさのとえ) *オルガンは昔は1台でも organs と言った。
- d. Pigs fly in the air with their tails forward. 「豚は尾を前方になびかせて空中を飛ぶ」(不可能なことのたとえか) *'when pigs fly' (=never)
- e. Pigs may fly, but they are very unlikely birds. 「子豚は飛ぶかもしれないが、そんな鳥はいそうにはない」(ありそうにない話を聞いて、信じられない時に用いる表現)
- f. Pigs may whistle, but they have an ill mouth for it. 「子豚は口笛を吹くことができようが、その口は吹くのに向いていない」
- g. Pigs love that lie together. 「豚は一緒に寝る豚を愛す」(野卑食欲な人々も、胸襟を開いて対話すれば友情が湧いてくる、の意)
- h. The hog never looks up to him that threshes down the acorns. 「豚はどんぐりを打ち落してくれた人を見上げない」(心のない人に施しをしても犬に劣る) *順風満帆の時は、命の恩人にすら無関心になる、の意。
- i. Swine, bees, and women cannot be turned. 「豚と蜂と女は進行方向を変えさせることができない」(「猪突猛進」(猪のように向う見ずに突進すること))
- j. Pigs can see the wind. 「豚には風が見える」(豚には嵐の前にそわそわしだす習性があるらしい)

まとめ

豚は、本当は清潔好きで賢い動物だという話を聞いたことがあるが、日英の諺に関する限り、人間からの評価は芳しくない。町から遠く離れた豚の飼育場が、住宅地の拡大に伴って、臭気と汚水が公害となり、廃業や移転に追いやられた話も珍しくはない。

VI. 結び

諺は庶民の生活の知恵であり、災難を未然に防ぎ、また人間の愚行を戒める警鐘ともなってきた。人間が人間に対して不平や不満を露わにすることをばかると見られる場合、人間よりは頭脳や品性の劣る動物の名を借りて、はげ口を動物に求めたとしても当然であろう。日英の動物にまつわる諺を比較してみると、イギリス人より日本人の方が動物に対して厳しい見方をしている場合が多く、また、日本の諺の方が逆説的な表現が多い。英語の諺は意外なことに素直な表現が多く、諺であると指摘されないと気づかないものも少なくない。今回、動物の諺から日英の文化を探ろうとした。しかし、皮

肉なことに、動物の善し悪しを盛り込んでいない諺以外の語句に歴史や文化の情報が多数盛り込まれていることに気がついたことは私にとって望外の収穫であった。今後、改めて日本語と英語の動物にまつわる語句を分析して、日本とイギリスの文化の特性などを探りたい。

参考文献

Wilson, F.P. (1970) *The Oxford Dictionary of English Proverbs*, 3rd edition, Oxford University Press.

大塚隆信、高瀬省三 (1976) 『英語諺辞典』三省堂。

柴田武、谷川俊太郎、矢川澄子 (1995) 『世界ことわざ大事典』大修館書店。

北村孝一 (2012) 『故事俗信ことわざ大辞典』(第二版) 小学館。